

男子学生が母性看護学実習前から 実習終了までに抱く困難感

大野理恵¹⁾・長鶴美佐子²⁾

key words : 男子学生, 母性看護学, 実習, 困難感, 経時的変化

I. はじめに

我が国の男子学生の母性看護学実習(以下「実習」)は、精神看護学実習で代替するという時代を経て、1989年のカリキュラム改正で初めて義務付けられた。この改正を機に、実習の展開方法の紹介や実習における課題等の問題点を導き出すための実態調査がなされ、その中で男子学生が実習に対する不安や性差に関わる困難感を持っていることが報告されている^{1) 2)}。

実習中に男子学生が抱く苦手意識や困難感についてはいくつかの研究があり、自己の性を過剰に意識し、女性がほとんどの病棟に身を置くことへのとまどい、受け持ち対象者(以下「対象」)からの受け入れに関する不安、女性の身体をイメージすることへの困難さなどが明らかにされている^{3) 4)}。

また、男子学生への実習指導に関する研究^{5) ~7)}では、教育的示唆として「男子学生への精神的配慮」、「実習前の個別の関わり」や「性差に配慮した教育的関わり」が導き出されているが、いずれも抽象度の高い示唆に止まっている。より教育実践に役立つような具体的な指導方法を導き出すためには、実習前から実習終了までの経時的な視点で、男子学生が抱く苦手意識や困難感をより詳細に明らかにしていくことが必要であると考え、本研究に着手した。

II. 目的

母性看護学実習前から実習終了までに男子学生が抱く学習への困難感を経時的な視点で明らかにする。

III. 方法

研究デザインは半構成的面接法を用いた質的帰納的研究である。研究参加者は母性看護学実習を3年次後期に3週間実施したA大学4年生の男子学生9名で、データ収集は母性看護学実習単位修得後の平成28年4月に行った。分析では、ま

ず録音されたインタビュー内容を逐語録にし、母性看護学実習前から実習終了までに抱いた学習への困難感に関する文脈をデータとして抽出した。その後、時系列に内容の類似性に従い分類し、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。なお、本研究では、困難感を「男子学生が感じる『苦手意識を持つこと』、『苦しみ悩むこと』『実習で円滑にいかない思い』などの母性看護学学習への消極的感情」と操作的定義をした。また、分析は、看護学研究の経験の有する看護師と指導者からスーパーバイズを受けながら進めた。

IV. 倫理的配慮

本研究の趣旨と研究への参加協力の自由の保障、対象者の匿名性およびプライバシーの保護、データは本研究の目的以外には使用しないこと、成績や学業遂行に不利益を生じないこと等を文書及び口頭で説明し、同意を得た。本研究は所属大学の研究倫理委員会(倫理審査番号第14号)の承認を得て実施した。本演題発表に関連して、開示すべき利益相反はない。

V. 結果

インタビュー時間は1名につき1回実施し、平均38分であった。

1. 研究参加者の概要

A大学の4年生の男子学生15名に研究協力の依頼を行い、9名から研究協力の同意を得た。研究参加者の平均年齢は22.7歳で、社会人経験者1名が含まれていた。

2. 母性看護学実習概要

研究参加者は、3年次前期に45時間の母性看護学講義を受けた後、後期の9月末から2月半ばまで、各看護学領域をローテーションしながら実習する臨地実習Ⅱの中で135時間の実習を行っている。

3. インタビューの時期と時間

インタビューの時期は、研究参加者の男子学生が実習の単

おの りえ 1) 宮崎県立看護大学大学院 2) 宮崎県立看護大学

位修得後の平成 28 年 4 月であり、一人一回行った。インタビューの平均時間は 38 分であった。

4. 男子学生が抱いた困難感

男子学生が抱いた困難感を実習前、実習中と時系列に抽出し、分析を行った。その結果、男子学生が実習前に抱いた困難感には 17 データから、13 サブカテゴリー、6 カテゴリー、実習中に抱いた困難感には 16 データから、9 サブカテゴリー、4 カテゴリーが生成された。

以下、困難感のカテゴリーは【 】、サブカテゴリーを〈 〉で示し、男子学生の語りであるデータの一部を「 」に表した。() は研究参加者の語りの意味を理解しやすいように、研究者が文言を補足したものである。

1) 実習前に抱いた困難感

受講開始から終了まで、終了から実習直前に分けて実習前の困難感分析を行った。

(1) 講義開始から終了までに抱いた困難感

講義開始から終了までに男子学生が抱いた講義・実習に対する困難感については、4 名が語っており、10 データから、7 サブカテゴリー、3 カテゴリーが生成された。

【看護の対象としてイメージできないという不安からくる学習への困難感】

男子学生は、母性看護学の講義が始まると、母性看護学の主たる対象である女性を理解するに当たって〈妊産婦等の看護に対する苦手意識〉、〈対象が異性であることでイメージが付かない〉、〈自分が男性であることを理由にした苦手意識〉など、【看護の対象としてイメージできないという不安からくる学習の困難感】を抱き、苦手意識や学習へ消極的な感情を抱いていた。

「(他の実習領域は) 事例を踏まえてこう、イメージできるけど…何か、妊婦さんの事例とか、何か、いまいち…身近に出産した人とかに接した経験がないためか…、想像できなくて、なんか苦手なんです。」「やっぱり自分が男性だから、そのホルモンのバランスとかそういうのを知識としては理解するけど、その、イメージができない。…病気とかと違って自分には起こりえないことだから、あんまりイメージがつかなくて。」

【学びづらく難しい学問領域とを感じる】

また、男子学生は、母性看護学は複雑で覚えることが沢山あり〈学問としての難しさを感じる〉学問であり、〈苦手な教科〉、〈テスト前にちょっと頑張る教科〉というように【学びづらく難しい学問領域とを感じる】傾向にあった。

「学んでおいて損はないだろうって感じではあったけど、そこまでまじめに取り組んだ感じではなかった。(中略) テスト勉強の時にちょっと頑張ったくらい…あんまり勉強してなかったかな。」「…なんか、もう苦手だなって思った瞬間から、こう…何か、勉強も、覚えよう覚えようになっちゃって。」

【興味がわからない】

男子学生はイメージが付きづらく、〈実感のなさから興味がわからない〉と理由付けをして、母性看護学を【興味がわからない】学問として受け止めており、消極的な学習姿勢が見られた。

「何か最初は講義を受けていても、なかなか興味がわいてこないっていう感じで、興味が無い分ちょっと身が入らなかつたりとかもしてて…。」

(2) 講義終了後から実習直前に抱いた困難感

講義終了後から実習直前に男子学生が抱いた実習に対する困難感については、6 名が語っており、7 データから、6 サブカテゴリー、3 カテゴリーが生成された。

【将来の看護師としての自分に関係がない】

実習直前になると、男子学生は産婦人科病棟に配属されることはほとんどないことから、実習は〈将来の職場としても無縁の世界〉で、【将来の看護師としての自分に関係がない】実習であると、消極的姿勢のままに実習へ臨んだ者もいた。

「全体的実習の中で母性って、男子学生にとって無縁、なんか職場としてもちょっと遠いから…あんまり深く考えていない状態で実習に行ってる…。」

【実習での看護展開についての不安】

男子学生の中には、これまでの実習で〈女性の患者さんを受け持った経験がないことによる不安〉を感じていた。また、対象との関わりに対する不安から〈実習を乗り切れるかという不安〉を抱いていた。さらに、実習直前には〈良い看護が提供できるだろうかという不安〉を抱いていた。

「(実習が始まる時期) ちょっと、乗り切れるのかどうかっていう…そういう不安がありました。妊婦さんとか褥婦さんへの看護ってどういふのがあるんだろうってのが、さっぱりイメージできなかった。」

「初めて(受け持つ)女性の患者さんだったので、上手く接することができるのだろうかというの…実習前の不安として大きい部分で…。」

【男性であることを理由に拒否されるのではないかと不安】

男子学生の中には、〈自分が男性であるがゆえに受け持ち対象が嫌がるのではないかと不安〉を抱き、【男性であることを理由に拒否されるのではないかと不安】を持つ者もあり、実習に対する不安や心配、消極性を示す者がいた。

「受け持ちさんは、男性がつくってというのが嫌なんじゃないだろうか…考えたりもしました。」

2) 実習中に抱いた困難感

実習中に男子学生が抱いた実習に対する困難感については、7 名が語っており、16 データから、9 サブカテゴリー、4 カテゴリーが生成された。

【対象が女性であることに対するやりづらさ】

男子学生は〈女性に触れることを意識してしまう〉、〈女性と話すことが苦手、話しづらい〉と感じるなど、実習では

【対象が女性であることに対するやりづらさ】を感じていた。

「向こうはそんなに気にしていなかったとは思うんですけど、(自分が)ちょっと意識してしまって、ま、女性を触るっていうことに意識してしまったんですかね。」「やっぱり女性だったからちょっと話しかけにくかったっていうのはちょっとあったかな・・・。」

【性差を強く意識した対象の見方】

男子学生は、実習や学習に対して<性差を理由にした諦め>を抱いていた。さらに、<自分が男子学生だからという理由で対象が嫌がるのではないかと消極的な気持ち>を抱き、患者が異性である自分に対して性差を感じてしまわないように振る舞おうとしており、<対象に性差を意識化させないための行動の困難さ>が見られた。

「男子学生だから、こう・・・断られるんじゃないかなっていう思いがあったんで、何もできないんじゃないかって思ったんです。実習中も一人の男性、男として、こう、女性の患者さんと接していた。」「僕は、抵抗はなかったのですが、対象の方が(男性が受け持つことを)どう思うのかなって・・・、どうしたら、(対象の方に性差を)感じさせないのかなっていうのが難しくって・・・」

【男性であるがゆえの実習上の制約】

男子学生という理由で<実践できることが限られる>ことで【男性であるがゆえの実習上の制約】を感じていた。

「なんかこう、できることも、ま、他の女子学生よりは少ないし、出産もやっぱり立会いはちょっと・・・っていう。男子学生はちょっと・・・っていう人もやっぱりたくさんいらっしやっで・・・、できることが少ないかなあって、思いましたね。」

【対象への看護が導き出せないことによる実習の不全感】

「看護実践をすることが実習である」との考えが強いため、<看護が導き出せないことに対する困難感>や<実習では何かしないといけないと思う焦りの気持ち>から【対象への看護が導き出せないことによる実習の不全感】を感じていた。

「受け持ちさんが看護師の方で、理解があったのか、いいですよって言うてくれて、授乳とかまでもみせてもらえたりしたんですけど・・・ま、なんですかね、看護師として何をすればいいかっていうのが全く思いつかなくて。結局ほとんど何もなかった感じですね。」

VI. 考 察

研究参加者である男子学生の語りから、講義前から実習において男子学生が抱く困難感については10カテゴリーが生成された。そのカテゴリーを時系列に見ると、男子学生は、講義を受講し始めてから、【看護の対象としてイメージできないという不安からくる学習への困難感】、【学びづらく難しい学問領域と感じる】、【興味がわからない】という、男性のみならず女性も抱きやすいと思われる母性看護学を学習する上での困難感を抱いていた。そして、講義受講後から実習までに

は、【将来の看護師としての自分に関係がない】、【実習での看護展開についての不安】、【男性であることを理由に拒否されるのではないかと不安】という困難感を抱いているということが明らかとなった。これらの母性看護学の学習上の困難感としてあげられた「イメージができないこと」や「学問としての学びづらさ」、「興味がわからない」事は、これまでの報告^{8) 9)}と同様であった。

都竹ら¹⁰⁾は、男子学生には実習に対しネガティブな気持ちを抱く者が多く、その理由として、性差による不安とともに、母性看護領域を男性看護師として将来働くことのない領域として捉えていることを挙げている。今回の男子学生にも、このように捉えた者がおり、これが講義や実習への学習姿勢を消極的なものとし、性差による不安とともに実習への困難感を助長していると考えられた。

さらに、実習中に抱いた困難感には、【対象が女性であることに対するやりづらさ】、【性差を強く意識した対象の見方】、【男性であるがゆえの実習上の制約】があり、これは「男性」という自己の性を強く意識した結果ともとれるものであった。さらに、実習展開においても、男子学生は、この性差を強く意識することで消極的になり、対象から受け入れられていても、対象への看護を導き出せずにおり、これが【対象への看護が導き出せないことによる実習の不全感】へとつながっていくと考えられた。これまでの研究⁴⁾でも、「性差の過剰な意識」や、「実施できる看護ケアに対する不安」などが困難感として示されているが、今回の結果は、学生の語りからそれらをより詳細に記述したものである。

今回の研究で明らかになった男子学生が抱く困難感は、看護者を目指す者としての意識でなく、一個人としての男性の意識で対象を捉えているために生じているのではないかと推測された。すなわち、対象中心の考え方でなく、自分中心の意識へと傾くにつれて、性差への意識が強くなり困難感が生じると考えられた。

本研究結果は、実習終了後から1~6ヵ月後の調査であり想起に影響している可能性、また教育・実習方法が男子学生への思いに影響している可能性を考慮しなければならない。

VII. 結 論

男子学生は、母性看護学実習前から、性別の違いを理由とした「看護の対象としてイメージできない不安」を抱き、母性看護学を「学びづらく難しい」「興味がわからない」学問領域と受け止め、学習への困難感を感じていた。また、実習中は、性差を強く意識することによる実習のやりづらさを困難感として感じていた。

本研究は所属大学院に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。

引用文献

- 1) 村井俊介, 高橋ゆかり: 男子学生の母性看護学実習における困難—今後の母性実習のあり方を考える—, 茨城県母性衛生学会誌, (25), p.67-71, 2005.
- 2) 高橋順子, 高野みち子, 雑賀美智子: 女子看護学生との比較からとらえる男子看護学生が感じている学習上の困難—看護専門学校三年課程の看護学生の記述内容分析から—, 四国大学紀要, 33, p.161-168, 2010.
- 3) 荒川直子: 母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難, 第 38 回日本看護学会論文集(看護教育), p.123-125, 2008.
- 4) 尾崎洋子, 木川富枝, 花田待子, 他: 母性看護学実習で男子学生が感じる困難, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 6, p.27-39, 2010.
- 5) 増田昌恵, 天野順子, 五影靖子, 他: 男子学生の母性看護学実習前後における意識調査—今後の実習のあり方の検討—, 第 37 回日本看護学会論文集(看護教育), p.75-77, 2007.
- 6) 畠中佳織, 峯馨, 林ひろみ: 母性看護実習における男子学生の実習前・実習中・実習後の体験, 千葉県立衛生短期大学紀要, 26 (1), p.89-95, 2007.
- 7) 二川香里, 松井弘美, 長谷川ともみ: 男子学生の視座から捉えた母性看護学実習における学習過程, 母性衛生, 55 (4), p.659-667, 2015.
- 8) 菊池泰子: 母性看護学に苦手意識を持たせる要因, 第 37 回日本看護学会論文集(看護教育), p.63-65, 2006.
- 9) 山口静江: 母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因, 第 43 回日本看護学会論文集(母性看護), p.84-87, 2013.
- 10) 都竹友季子, 野田貴代, 出口睦雄: 看護学生の母性看護学実習に対する意識調査(第 3 報) 母性看護学実習に対する男女の意識の違いと母性意識の高まる指導的関わりについて, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 6, p.7-13, 2010.